

内的安定的帰属スタイルと抑うつとの関係の検討

筑波大学大学院(博)心理学研究科 家接 哲次

筑波大学心理学系 小玉 正博・田上 不二夫

The relation between internal-stable attributional style and depression

Tetsuji Ietsugu, Masahiro Kodama and Fujio Tagami (*Institute of Psychology, University of Tsukuba, Tsukuba 305-8572, Japan*)

Depressive attributional style has three dimensions: internality (internal-external), stability (stable-unstable), globality (global-specific). Critics have questioned the validity of internality, claiming that it has no relation to depression. To deal with this criticism, the present study examines internality. A questionnaire measuring the attributional style was administered to 112 college students. The results indicated that there are two dimensions to internality (internal and external dimensions), and that only internal-stable attribution is associated with depression. Based on this finding, an internal-stable attribution scale was developed, and tested for reliability and validity. A secondary purpose of this study is to test the hypothesis that in addition to being trait-dependent, attributional style is also mood-state dependent. The result showed that internal-stable attributional style could predict an individual's depressive mood three months later, and that attributional style was influenced by the individual's mood when assessed.

Key words: internal-stable attributional style, depression, mood-state dependent

帰属スタイルとは、「ある事柄が起こった原因は何かという問題への習慣的な答えの出し方」(Layden, 1982)のことをいい、抑うつ帰属スタイル(Depressive Attributional Style)は、否定的な出来事の原因を内的(『自分のせいだ』)、安定的(『いつも存在する』)、全般的(『他の状況にも影響を与える』)に帰属し、肯定的な出来事の原因を外的(『他の人や環境のせいだ』)、不安定的(『二度と存在しない』)、特殊的(『今回の状況だけに影響を与える』)な帰属をすることであり、抑うつへの脆弱因子と考えられてきた(Seligman, Abramson, Semmel & von Baeyer, 1979)。しかしながら、その後の研究では出来事の原因を内的か外的かに帰属する内在性(internality)の次元が次第に抑うつと関係がないという見解が提示されるようになった。例えば、Golin, Sweeny & Shaeffer(1981)は、大学生を対象にした調査で、内在性次元が1ヶ月後のうつを予測しないことを報告

している。また Peterson, Raps & Villanova(1985)は、それまでの帰属スタイルを扱った論文(61編)を分析した結果から、出来事の原因を安定的か、不安定的かに帰属する安定性(stability)の次元と全般的か特殊的に帰属する全般的性(globality)の次元、および内在性・安定性・全般的性の3次元の組み合わせ(composite)に関しては、被験者数を増やしたり、原因帰属を評定する仮想場面の数を増やしたりすることで抑うつとの相関は高まるが、内在性次元単独ではそのようなことが見られないと報告している。このような研究結果から帰属スタイルにおける内在性次元と抑うつとの関係は疑問視されるようになっていった。

これに対して帰属スタイルの研究領域以外では、否定的な出来事の原因を自分に関連づけることと抑うつとの関係は支持されているようにも思われる。例えば、Blatt, Quinlan, Chevron, McDonald &

Zurofft(1982)は、依存性(dependency)と並んで自己非難性(self-criticism)が抑うつと関連があることを報告している。また Greenberg & Pyszczynski (1986)は、抑うつ傾向者が失敗の後に自己に注意を向けることを報告している点などから、帰属スタイル研究で疑問視されている内在性と抑うつとの関連があることは否定しきれない面があると考えられる。

ここで内在性次元が抑うつと関連がないという研究結果が提出されるにいたった背景には、帰属スタイルを測定する尺度の問題があると思われる。これまで最も広く使用されている尺度は Attributional Style Questionnaire(ASQ; Peterson, Semmel, von-Baeyer, Abramson, Metalsky & Seligman, 1982)であるが、この尺度は対人と達成の2つの領域において肯定的な仮想場面(3つ)と否定的な仮想場面(3つ)の合計12場面について、帰属スタイルを測定するようになっている。Peterson et al. (1982)においては、対人・達成の2つの領域をあわせた成功場面と失敗場面(それぞれ6場面)での各次元の内的一貫性は.44~.69と問題がないと報告されている。しかしながらその後の研究で、低い内的一貫性、特に内在性次元において α 係数が.33と低い値を示しており、信頼性に問題があることが報告されている(Cutrona, Russell & Jones, 1985)。このように内在性次元と抑うつとの関連を弱めている大きな原因は、帰属スタイルの測定尺度の信頼性の低さにあるのではないと思われる。

2つ目の問題として、帰属スタイルの測定方法が挙げられる。ASQでは、内的帰属の反対は外的帰属と強制的に1次元扱いになっている。出来事の原因を自分にあると帰属した場合でも、同時に他の人や環境にも原因を帰属することはないのである。この問題が検証されずに、ASQでは1次元扱いになっているが、ASQの信頼性の低さは内在性を強引に1次元として扱ったために生じているかもしれない。つまり、帰属スタイルにおける内在性は1次元ではなく、自分に帰属する内的次元と自分以外に帰属する外的次元の2つの次元から構成されている可能性があると思われる。そこで、研究1の目的として内在性の次元を内的次元と外的次元に分けて抑うつとの関係を検討し、より抑うつと関連性のある尺度を開発する。なおここで内的次元に関しては、失敗を自分の性質に帰属することは抑うつと関係があるが、自分の行動に帰属する場合は抑うつと関係がないという報告(Janoff-Bulman, 1979)があり、内的次元の中でも安定的帰属が加わった(自分の能力や才能に原因を帰属した)時に抑うつと関連する可能性があるため、安定性の次元も加味して検討する

ことにする。また全般性の次元に関しては、Golin et al. (1981)によると安定性の次元と比較的相関が高く($r = .51 \sim .56$)、安定性の次元を扱うことで全般性の次元もかなりの部分を扱えると思われたので本研究では省くことにした。

帰属スタイル研究におけるもう1つの大きな問題は、その因果関係である。本来帰属スタイルは、抑うつの原因的存在として登場した概念であり、抑うつへの脆弱因子として仮定されていた。この仮説を支持する研究も多く報告されており、例えば Eaves & Rush(1984)は、薬物療法と心理療法を行って寛解したうつ病性障害者(24名)が健常者(17名)と比べて、高いASQ得点(抑うつ帰属スタイル)を示していることを報告している。また、Seligman, Peterson, Kaslow, Tanebaum, Alloy & Abramson(1984)は、児童用に作成した帰属スタイル尺度(CASQ: Children's Attributional Style Questionnaire)を使って児童(96名)を対象にした調査で、帰属スタイルは6ヶ月後のうつを予測したと報告している。しかしながら、この観点を否定するような研究も報告されるようになってきた。例えば、Hamilton & Abramson(1983)は、薬物療法と心理療法を行った大うつ病性障害者(20名)のASQ得点が改善して健常者(20名)と差がなくなったことから、帰属スタイルは抑うつ状態依存であることを示唆している。Dohr, Rush & Bernstein(1989)にいたっては、抗うつ薬による薬物療法によって抑うつ帰属スタイルが軽減したことを報告しており、Cochran & Hammen(1985)は、2ヶ月の追跡調査で、帰属スタイルは抑うつの原因というよりは、結果であると結論づけている。このように先行研究は、帰属スタイルは抑うつの原因か、結果かということで大きく矛盾している。これらの研究は、帰属スタイルと抑うつとの間に一方方向の関係しか考えていないが、最近になって、抑うつへの認知的脆弱因子は否定的な気分状態でのみ有効に作用するという、認知と気分の双方向の関係を示唆している研究報告(Persons & Miranda, 1992)がなされるようになってきた。この観点から見ると先行研究に見られる矛盾も解決できると思われる。つまり、帰属スタイルは抑うつの原因でもあり、結果でもあり、双方が影響し合っていると考えられる。この点を明らかにするために本研究の第2の目的は、抑うつ症状の根底にあると言われている抑うつ気分焦点をあてて、帰属スタイルは抑うつ気分の脆弱因子でもあり、抑うつ気分の影響も受けるという双方向の関係を検証する。

研究1-1 内在性と抑うつの関係の検討と新しい帰属スタイル尺度の作成

目 的

研究1-1では、これまで1次元扱いされてきた内在性次元を内的帰属と外的帰属に分けることの妥当性を検討し、新しい帰属スタイル尺度を作成する。

方 法

Peterson et al.(1982)のASQや村上(1989)の帰属様式尺度を参考にして、達成及び対人領域において、それぞれ成功(4場面)、失敗(4場面)の計16の仮想場面に関して原因帰属スタイル(内的安定、内的不安定、外的安定、外的不安定)が測定できる計64項目(5件法：全くそう思わない～かなりそう思う)からなる予備尺度を作成した。

調査対象者

国立T大学の大学生112名(男性41名、女性71名)。平均年齢は、20.5歳(SD = 1.44)。

実施期間

2000年5月下旬～6月初旬に実施した。

質問紙

- (1) 予備尺度
- (2) 抑うつ尺度

Zung(1965)が開発した自己記入式抑うつ尺度(SDS: Self-rating Depression Scale)の日本語版(福田・小林, 1973)で20項目4件法で測定している。

- (3) 自尊感情尺度

Rosenberg(1965)が開発した尺度の日本語版(星野, 1970)で10項目4件法で測定する。Rosenberg(1965)によると、自尊感情が高いということは、自分を「これでよい(good enough)」と感ずることであり、自分自身を尊敬し、価値ある人間であると考えられる程度である(井上, 1992)。このことから抑うつ帰属スタイル的であれば、自尊感情とは負の相関が予想される。

結 果

まず、予備尺度を4つの領域・場面組合せ(達成・成功、達成・失敗、対人関係・成功、対人関係・失敗)と4つの帰属スタイル(内的安定、内的不安定、外的安定、外的不安定)で、16の下位尺度(各4項目)に分類した(Table 1)。次に、この分類をもとにして、成功及び失敗場面での内的帰属スタイルと外的帰属スタイルの尺度得点をそれぞれ算出した。

内的帰属と外的帰属の相関は成功場面では、-.065(p>.10)と無相関であり、失敗場面でも、有意

Table 1 領域・場面と原因帰属

課題領域	成功場面	①内的・安定的帰属
		②内的・非安定的帰属
	失敗場面	③外的・安定的帰属
		④外的・非安定的帰属
対人領域	成功場面	⑤内的・安定的帰属
		⑥内的・非安定的帰属
		⑦外的・安定的帰属
		⑧外的・非安定的帰属
	失敗場面	⑨内的・安定的帰属
		⑩内的・非安定的帰属
		⑪外的・安定的帰属
		⑫外的・非安定的帰属

- * 成功場面の内的帰属 = ① + ② + ⑨ + ⑩
- * 成功場面の外的帰属 = ③ + ④ + ⑪ + ⑫
- * 失敗場面の内的帰属 = ⑤ + ⑥ + ⑬ + ⑭
- * 失敗場面の外的帰属 = ⑦ + ⑧ + ⑮ + ⑯
- * 成功場面の内在性 = ① + ② + ⑨ + ⑩ - ③ - ④ - ⑪ - ⑫
- * 失敗場面の内在性 = ⑤ + ⑥ + ⑬ + ⑭ - ⑦ - ⑧ - ⑮ - ⑯

(p<.01)ではあるが、-.257と1次元として扱うには低い値であった。また内在性次元を1次元とみなして、外的帰属を逆転項目とし、内的帰属尺度得点に加算して、内在性次元尺度得点を算出して、抑うつと自尊感情の相関をみたところ、成功場面自尊感情と有意(r = .305, p<.01)な相関が見られたが、抑うつとは成功および失敗場面ともに有意な相関は見られなかった。このことから、これまで1次元上の対極として扱われてきた内的帰属と外的帰属は別々の次元として扱った方がよいことが伺われた。

次に、各原因帰属と抑うつおよび自尊感情との関連を検討するために、16の下位尺度得点と抑うつ尺度得点および自尊感情尺度得点との相関を算出した(Table 2)。その結果、比較的高い相関が見られたのは、やはり内的安定的帰属得点(|r| = .232~.305)だけだった。内的帰属と安定的帰属がそろった時、すなわち、事象を自分の能力や才能に帰属した時のみ、抑うつ状態や自尊感情の低下と関連があることが見いだされた。よって以後の研究は、内的安定的帰属スタイルに絞って進めていってよいと思われる。そこで、内的安定的帰属スタイルの4つの場面(達成・成功、達成・失敗、対人関係・成功、対人関係・失敗)におけるI-T相関を検討したところ、極端に低い項目が1つずつ見られたので、それらを削除して各場面ごと3項目からなる計12項目を選出し

Table 2 各原因帰属と抑うつ・自尊感情との相関

原因帰属	抑うつ	自尊感情
課題成功・内的安定帰属	-0.232*	0.322**
課題成功・内的非安定帰属	-0.178	0.018
課題成功・外的安定帰属	0.105	-0.087
課題成功・外的非安定帰属	-0.051	-0.192*
課題失敗・内的安定帰属	0.129	-0.252**
課題失敗・内的非安定帰属	0.066	-0.098
課題失敗・外的安定帰属	0.028	-0.179
課題失敗・外的非安定帰属	0.062	-0.137
対人成功・内的安定帰属	-0.305**	0.277**
対人成功・内的非安定帰属	-0.173	0.141
対人成功・外的安定帰属	-0.102	-0.130
対人成功・外的非安定帰属	-0.037	-0.096
対人失敗・内的安定帰属	0.304**	-0.440**
対人失敗・内的非安定帰属	0.095	-0.166
対人失敗・外的安定帰属	-0.049	-0.129
対人失敗・外的非安定帰属	-0.063	0.003

* $p < .05$ ** $p < .01$

た。なお予備調査での回答形式は、1つの仮想場面に対し、4つの帰属スタイルを回答する形式であったが、内的安定的帰属スタイルのみが抑うつ状態ならびに自尊感情の低下と関連が見いだされたことから、他の帰属スタイルを削除した尺度を作成する必要がある。そこで、上記の手続きで得られた12項目を元にして、仮想場面の記述している部分と、それに対する帰属スタイルを問う部分をまとめて1つの文章になるように、予備調査尺度の内容と異ならないように注意しながら若干の修正をして、内的安定的帰属スタイル尺度を作成した。

研究1-2 内的安定的帰属スタイル尺度の内的一貫性と妥当性の検討

目的

研究1-1で作成された内的安定的帰属スタイル尺度の信頼性と妥当性を検討することを目的とする。併存的妥当性を検討する尺度として、抑うつスキーマ尺度と抑うつ尺度を使用した。抑うつスキーマとは、刺激をスクリーニングし、コード化し、評価するための1つの認知構造であるが、帰属スタイルと同様に抑うつへの脆弱因子として考えられてきた(Blaney, Behar & Head, 1980)。また帰属スタイルと抑うつとの関係は、Cutrona et al. (1985)が報告しているように、決して高い相関が得られるわけではないが(内在次元: $r = .12$, 安定次元: $r = .14$, 全般次元: $r = .20$, 3次元の組合せ: $r = .22$; いずれも否定的な出来事に対する帰属)、多くの研究者

が有意な相関を報告している。

方法

調査対象者

茨城県の国立T大学の大学生296名(男性144名, 女性152名), 山梨県の県立T大学の大学生213名(男性49名, 女性164名)の計509名。平均年齢は, 18.9歳 ($SD = 1.12$)。

実施期間

2000年6月初旬から中旬。

質問紙

- (1) 研究1-1で作成された内的安定的帰属スタイル尺度
- (2) 抑うつスキーマ尺度: 家接・小玉(1999)が作成した尺度(DSS: Depressogenic Schemata Scale)は、抑うつ傾向者が独特にもつと言われる認知的歪みを測定する質問紙である。「高達成志向」, 「他者依存的评价」, 「失敗回避」の3因子合計24項目7件法で測定している。
- (3) 抑うつ尺度: Zung(1965)が開発した自己記入式抑うつ尺度(SDS: Self-rating Depression Scale)の日本語版(福田・小林, 1973)で20項目4件法で測定している。

結果と考察

内的安定的帰属スタイル尺度の失敗場面全般(6項目)と成功場面全般(6項目)の内的一貫性を検討したところ、それぞれ $\alpha = .652, .803$ となり、やや失敗場面の α 係数が低い、両者ともほぼ内的一貫性があることが確認された。次に、抑うつスキーマ並びにうつとの相関を見たところ、失敗場面ですべて、.280と.156と低い値ながら有意(いずれも $p < .01$)の相関が見られ、併存的妥当性もあると思われた。成功場面では、抑うつとの相関は低いながらも有意($r = -.136, p < .01$)であったが、抑うつスキーマとは有意な相関が得られず、今後検討が必要などころである。

研究1-3 内的安定的帰属スタイル尺度の再検査信頼性及び因子的妥当性の検討

目的

研究1-3では、内的安定的帰属スタイル尺度の再検査信頼性及び因子的妥当性を一定期間の間隔をあけた2回の調査で検討することを目的とする。

方 法

調査対象者

国立T大学の大学生226名(男性103名, 女性123名).
平均年齢は, 18.7歳(SD = .89).

実施期間

2000年6月初旬から中旬(T1: Time 1) 及び同年9月初旬から中旬(T2: Time 2).

質問紙

(1) 研究1-1で作成された内的-安定的帰属スタイル尺度

結 果

成功場面(6項目)及び失敗場面(6項目)の α 係数はそれぞれ, .668及び.554と有意($p < .01$)な値が得られ, 再検査信頼性が認められた. またT1及びT2のデータを因子分析(一般化された最小2乗法・プロマックス回転)をしたところ, いずれも成功場面と失敗場面の2因子が抽出され, 因子構造も頑強であることが認められた.

研究1の考察

研究1では, まず内在性次元が内的次元と外的次元の2次元に分かれることが明らかになった. また抑うつと関連があるのは内的次元に安定的次元が加わった場合のみであることも明らかになった. この2つのことから内的安定的帰属スタイル尺度を作成し, その信頼性と妥当性を概ね確認した. なお, 研究1-2で, 成功場面での帰属スタイルと抑うつ及び抑うつスキーマとの相関が低かった点に関しては, ASQを用いた調査で失敗場面に対する内的, 安定的, 全般的帰属では, うつ病患者(25名)と健常者(19名)に差があるが, 成功場面に対する内的, 安定的, 全般的帰属では両者に差がない(Dohr et al., 1989)と報告しており, 成功場面での帰属スタイルと抑うつとは関連が弱いと思われる.

研究2 帰属スタイルと抑うつ気分との関係の検討

目 的

これまで帰属スタイル研究では, 大きく分けて帰属スタイルが抑うつの原因的な存在とする立場(Eaves & Rush, 1984; Seligman et al., 1984)と, 逆に帰属スタイルは抑うつに付随するものとする立場(Cochran & Hammen, 1985; Dohr et al., 1989; Hamilton & Abramson, 1983)があった. これらの先行研究は, 帰属スタイルと抑うつとの間に一方方向

の関係しか考えてこなかったために矛盾が生じていると思われる. 最近になって Persons & Miranda (1992)のように両者の双方向の関係を重視されるようになってきたが, 帰属スタイルは, 抑うつの脆弱因子でもあり, 抑うつ気分の影響も受けるという仮説を検証することを目的とする.

方 法

調査対象者

国立T大学の大学生226名(男性103名, 女性123名).
平均年齢は, 18.7歳(SD = .89).

実施期間

2000年6月初旬から中旬(T1: Time 1)及び同年9月初旬から中旬(T2: Time 2).

質問紙

- (1) 研究1-1で作成された内的-安定的帰属スタイル尺度
- (2) 抑うつ尺度: Zung(1965)が開発した自己記入式抑うつ尺度(SDS: Self-rating Depression Scale)の日本語版(福田・小林, 1973)で20項目4件法で測定している.

結果と考察

まず各質問紙項目得点分布の正規性を検討した. T1およびT2での内的安定的帰属スタイル尺度得点分布には問題なかったが, T2のSDS得点は, No.4(不眠), No.7(痩せてきた), No.8(便秘), No.9(動悸がする), No.19(希死念慮)が, 極端に分布が偏り, フロアー効果並びに天井効果が見られたため, この5項目を以下の分析から削除することにした. 次にT2のSDSの因子分析を行った(一般化された最小2乗法, プロマックス回転)ところ, 2因子が抽出された. 第1因子は, 「生活はかなり充実している(逆転項目)」に代表される「うつ認知」, 第2因子は「いつもよりいらいらする」に代表される「抑うつ気分」である. 本来SDSは因子構造を想定した尺度ではないが, Morrisら(1975)は, 自己満足(self-satisfaction: 逆転項目)と動揺(agitation)の2因子を抽出しており, 本研究で得られた「抑うつ認知」と「抑うつ気分」の2因子とほぼ内容も対応している. ここで本研究では, 抑うつ気分と帰属スタイルの関係を検討することを目的とするため, 「抑うつ気分」の因子を代表する3項目を選択して以下の分析に用いることにした. ここで今回SDSはT1とT2で2回測定したが, 検討するモデル上, T2のみを分析に用いた. またT1およびT2の内的安定的帰属スタイル尺度に関しては, それぞれ課題・対人の領域を代表すると思われる2項目を選択して分析に用いた(Table 3).

Table 3 共分散構造分析で用いられた項目

1. 達成領域における否定的場面での原因帰属	
X 1 (X 5)	もしもあなたが授業の発表をうまくできなかったとしたら、自分に能力がなかったからだと思う。
X 2 (X 6)	もしもあなたが自分の希望する職業に就けなかったとしたら、自分に能力がなかったからだと思う。
2. 対人領域における否定的場面での原因帰属	
X 3 (X 7)	もしもあなたの異性関係がうまくいっていないとしたら、自分に魅力がないからだと思う。
X 4 (X 8)	もしもあなたがしたことを友人から批判されたとしたら、自分に才能がないからだと思う。
3. 抑うつ気分	
X 9	気分が沈んで憂うつだ
X 10	泣いたり、泣きたくなる
X 11	いつもよりいらいらする

* X 1とX 5, X 2とX 6, X 3とX 7, X 4とX 8は, それぞれ同一項目。

なお今回は Dohr et al. (1989)が報告しているように, 肯定的場面での帰属よりは否定的場面の帰属スタイルが抑うつに関係があるため, 後者に焦点をあててことにした。

このようにして選択した項目を用いて, 内的安定的帰属スタイルと抑うつ気分の双方向モデルを検証するために最尤法による共分散構造分析を行ったところ, 受容できる適合度が得られた(GFI = .959, AGFI = .923, RMSEA = .049)。次に構成概念間の因果係数を求めた(Fig. 1; z1~z11は誤差変数, y1~y6は攪乱変数)。T1の帰属スタイル(以下, 「T1帰属」)からT2の帰属スタイル(以下, 「T2帰属」)への因果係数は.70と有意($p < .01$)であり, 「T1帰属」からT2の抑うつ気分(以下, 「T2抑うつ気分」)への因果係数は.19($.05 < p < .10$)と有意傾向であった。このことから帰属スタイルは, 3ヶ月後の抑うつ気分に影響を与えていることが伺われた。また, 「T2抑うつ気分」から「T2帰属」への因果係数は.19($.05 < p < .10$)と低い値であるが, 抑うつ気分がその時の帰属スタイルに影響を与えている可能性がうかがわれた。以上のことから, 帰属スタイルは抑うつ気分の原因的役割を演じつつも, 抑うつ気分の影響も受けるという結果が得られた。

まとめ

本研究には, 2つの大きな目的があった。第1の目的は, 帰属スタイル理論における内在性次元の再考である。これまで内在性次元は内的帰属と外的帰属

属が同一次元の対極として扱われてきたため, 内在性次元の内の一貫性が低く, 抑うつとの関連も疑問視されてきた。研究1では, 内的帰属と外的帰属がはたして同一次元上に存在するかどうか検討したところ, 1次元として扱うには無理があることが見いだされた。そのため改めて別次元として抑うつおよび自尊感情との関連を検討したところ, 内的帰属(+安定的帰属)に関連が見られたが, 外的帰属には関連が見られなかった。このことから, これまで帰属スタイルを測定するために広く使用されてきたASQでは外的帰属を測定する項目が内在性の一貫性を低下させ, さらに抑うつとの関連も弱めていた可能性が伺われた。次に内在性次元の中の内的帰属のみをとりだして, それにJanoff-Bulman(1979)が指摘するように安定性次元を加えて, 抑うつ及び自尊感情との関連を検討したところ, 内的安定的帰属のみがそれらと関連があることが見いだされたため, 内的安定的帰属スタイルを測定する尺度を作成し, その信頼性と妥当性を検証した。

研究2では, 帰属スタイルと抑うつ気分との因果関係に関する検討を行った。約3ヶ月の間隔をあけた2回の測定の結果, 帰属スタイルは特性としての安定性を保持しつつも, 同時に抑うつ気分の影響を受けるという状態依存性もあるということが見いだされた。このような帰属スタイルといった認知変数と抑うつ気分の双方向の関係に関しては, Persons & Miranda(1992)が気分-状態仮説(mood-state hypothesis)を提示して説明している。彼らによると認知変数は抑うつ気分の原因的役割も演じつつ, 抑うつ

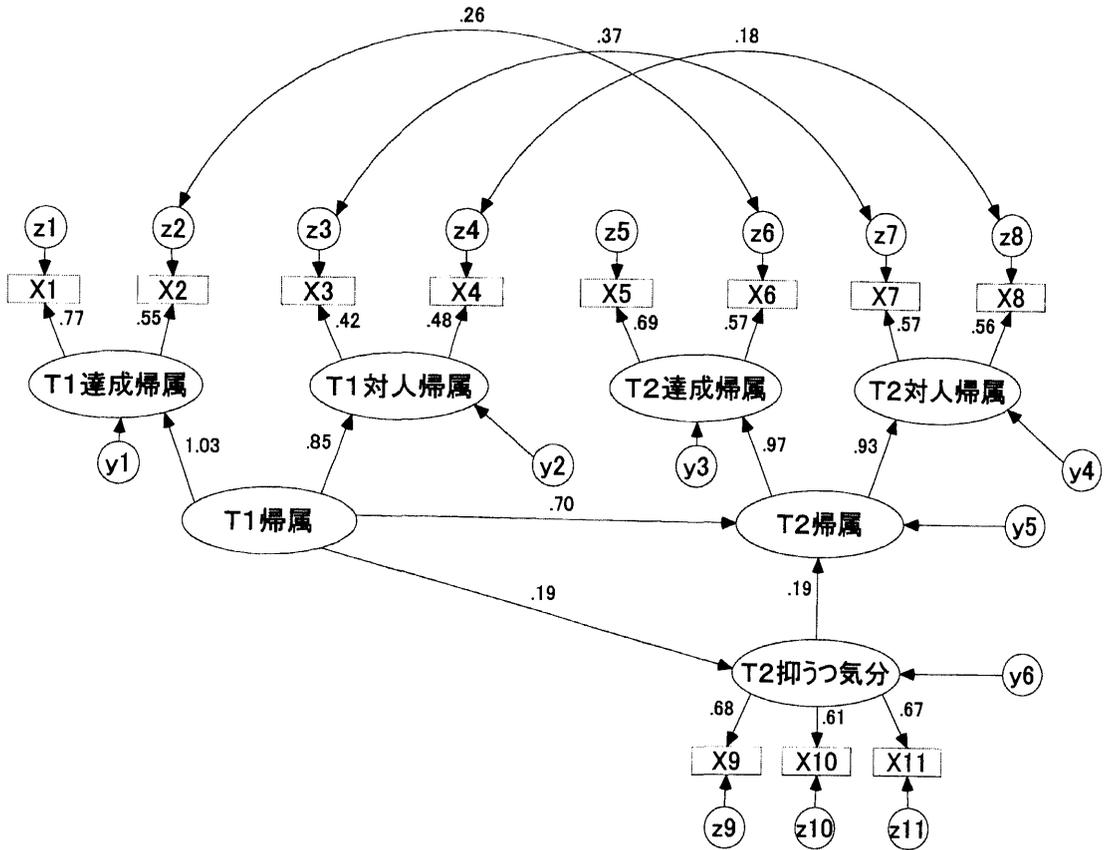


Fig. 1 帰属スタイルと抑うつ気分に関するパス図

気分からの影響も受ける存在であるという。この仮説の観点に立つと、これまでの先行研究に見られた矛盾を解決できると同時に、抑うつケアにおける重要な示唆が得られる。これまで認知変数が抑うつの結果であるという研究結果から心理療法の必要性を否定する見解もあった(Barnett & Gotlib, 1988)が、認知変数と抑うつ気分とに双方向の関連があるならば、帰属スタイル療法(Layden, 1982)などの心理療法と直接気分作用する薬物療法の組み合わせが重要であるといえ、今後心理療法と薬物療法の両者が抑うつケアにおいて重視されていくと思われる。

引用文献

Barnett, P.A. & Gotlib, I.H. 1988 Psychosocial functioning and depression: Distinguishing among antecedents, concomitants, and consequences. *Psychological Bulletin*, 104, 97-126.
 Blaney, P.H., Behar, V. & Head, R. 1980 Two meas-

ures of depressive cognitions: Their association with depression and with each other. *Journal of Abnormal Psychology*, 89, 678-682.
 Blatt, S.J., Quinlan, D.M., Chevron, E.S., McDonald, C. & Zuroff, D. 1982 Dependency and self-criticism: Psychological dimensions of depression. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, 50, 113-124.
 Cochran, S.D. & Hammen, C.L. 1985 Perceptions of stressful life events and depression: A test of attribution models. *Journal of Personality and Social Psychology*, 48, 1562-1571.
 Cutrona, C.E. 1983 Causal attributions and perinatal depression. *Journal of Abnormal Psychology*, 92, 161-172.
 Cutrona, C.E., Russell, D. & Jones, R.D. 1985 Cross-situational consistency in causal attributions: Does attributional style exist? *Journal of Personality and Social Psychology*, 47, 1043-1058.

- Dohr, K.V., Rush, A.J. & Bernstein, I.H. 1989 Cognitive biases and depression. *Journal of Abnormal Psychology*, **93**, 263-267.
- Eaves, G., Rush A.J. 1984 Cognitive patterns in symptomatic and remitted unipolar major depression. *Journal of Abnormal Psychology*, **93**, 31-40.
- 福田一彦・小林重雄 1973 自己評価式抑うつ性尺度の研究 精神神経学雑誌, **75**, 673-679
- Golin, S., Sweeny, P.D. & Shaeffer, D.E. 1981 The causality of causal attribution in depression: A cross-lagged panel correlational analysis. *Journal of Abnormal Psychology*, **90**, 14-20.
- Greenberg, J., & Pyszczynski, T. 1986 Persistent high self-focus after failure and low self-focus after success: The depressive self-focusing style. *Journal of Personality and Social Psychology*, **50**, 1039-1044.
- Hamilton, E.W., & Abramson, L.Y. 1983 Cognitive patterns and major depressive disorder: A longitudinal study in a hospital setting. *Journal of Abnormal Psychology*, **92**, 173-184.
- 星野 命 1970 感情の心理と教育(一, 二)児童心理, **24**, 1264-1283, 1445-1477.
- 家接哲次・小玉正博 1999 新しい抑うつスキーマ尺度の作成 健康心理学研究, **12**, 37-46.
- 井上祥治 1992 セルフ・エスティームの心理学 遠藤辰雄・井上祥治・蘭 千壽(編)セルフ・エスティームの測定法とその応用 ナカニシヤ出版 Pp.26-36.
- Janoff-Bulman, R. 1979 Characterological versus behavioral self-blame: Inquiries into depression and rape. *Journal of Personality and Social Psychology*, **37**, 1798-1809.
- レイデン M.A. 1993 帰属スタイル療法 アンタキ C.・ブレイウィン C.(編)細田和雅・古市裕一(監訳)原因帰属と行動変容—心理臨床と教育実践への応用—ナカニシヤ出版 Pp.78-101. (Layden, M.A. 1982 Attributional style therapy. Antaki, C., & Brewin, C. (Eds.) *Attributions and Psychological Change*. Academic Press.)
- Morris, J.N., Wolf, R.S. & Klerman, L.V. 1975 Common themes among morale and depression scales. *Journal of Gerontology*, **30**, 209-215.
- 村上裕恵 1989 状況の変化に伴う帰属様式の変化に関する実験的研究 慶應義塾大学大学院社会学研究科紀要, **29**, 25-32.
- Persons, J.B. & Miranda, J. 1992 Cognitive theories of vulnerability to depression: Reconciling negative evidence. *Cognitive Therapy and Research*, **4**, 485-502.
- Peterson, C., Raps, C.S. & Villanova, P. 1985 Depression and attributions: Factors responsible for inconsistent results in the published literature. *Journal of Abnormal Psychology*, **94**, 165-168.
- Peterson, C., Semmel, A., von Baeyer, C., Abramson, L.Y., Metalsky, G.I. & Seligman, M.E.P. 1982 The attributional style questionnaire. *Cognitive Therapy and Research*, **6**, 287-300.
- Rosenberg, M. 1965 *Society and the adolescent self-image*. Princeton: Princeton University Press.
- Seligman, M.E.P., Abramson, L.Y., Semmel, A. & von Baeyer, C. 1979 Depressive attributional style. *Journal of Abnormal Psychology*, **88**, 242-247.
- Seligman, M.E.P., Peterson, C., Kaslow, N.J., Tanenbaum, R.L., Alloy, L.B. & Abramson, L.Y. 1984 Attributional style and depressive symptoms among children. *Journal of Abnormal Psychology*, **93**, 235-238.
- Zung, W.W.K. 1965 A self-rating depression scale. *Archives of General Psychiatry*, **12**, 63-70.

資料 内的—安定的帰属スタイル尺度

以下の状況に自分自身がおかれていると想像してみてください。もしそのようなことがあなたに起こった(起きている)としたら、その原因についてあなたはどれにあてはまるかをお答えください。(1：全くあてはまらない～5：かなりあてはまる)

1. もしもあなたが自分の希望する職業に就けたとしたら、自分に能力があったからだと思う。
2. もしもあなたが自分の希望する職業に就けなかったとしたら、自分に能力がなかったからだと思う。
3. もしもあなたがよい成績をとったとしたら、自分に能力があったからだと思う。
4. もしもあなたがアルバイトの遅刻を繰り返したとしたら、自分の性格に問題があるからだと思う。
5. もしもあなたの異性関係がうまくいっているとしたら、自分に魅力があるからだと思う。
6. もしもあなたの異性関係がうまくいっていないとしたら、自分に魅力がないからだと思う。
7. もしもあなたが好きな人と付き合うことになったとしたら、自分に魅力があるからだと思う。
8. もしもあなたがしたことを友人から批判されたとしたら、自分に才能がないからだと思う。
9. もしもあなたが授業の発表をうまくできたとしたら、自分に能力があったからだと思う。
10. もしもあなたが授業の発表をうまくできなかったとしたら、自分に能力がなかったからだと思う。
11. もしもあなたに友達が沢山いるとしたら、自分に魅力があるからだと思う。
12. もしもあなたに友達がいないとしたら、自分に魅力がないからだと思う。

* 達成領域・成功場面：No.1, No.3, No.9

* 達成領域・失敗場面：No.2, No.4, No.10

* 対人領域・成功場面：No.5, No.7, No.11

* 対人領域・失敗場面：No.6, No.8, No.12